

R.H. ブライズの俳句観：芭蕉論  
R.H. Blyth's View on Haiku: Basho

上田邦義・氏家飄乎

UEDA Kuniyoshi・UJIE Hyouko

**Abstract:** The international popularity of “haiku” today was a direct result of R.H. Blyth’s four volumes of *HAIKU* published soon after World War II.<sup>1</sup> Even during the war, Blyth ( 1898 - 1964 ) had issued *Zen in English Literature* in Tokyo which was to be acclaimed by the British author Aldous Huxley enjoying his last years in California and many others in the passionate reception of Zen in America and Europe.<sup>2</sup> This paper tries to reveal the secret of the popularity of “haiku” by tracing Blyth’s “Four Great Haiku Poets: Basho”. Examined is one of the core chapters (its first Japanese translation has been attempted and included in this article) in *HAIKU* Vol. I, in which Blyth evaluates Basho as “the Way, the Truth and the Life,” and “not only the greatest of all Japanese, but that he is to be numbered among those few human beings who lived, and taught us how to live by living.” Blyth compares Basho partly to Christ, Wordsworth, St. Francis, Keats, and Chaucer, and especially to Thoreau, “the most remarkable, perhaps the greatest man America has produced.”<sup>3</sup> *Key words:* Blyth, haiku, Basho, Thoreau.

俳句の国際性とブライズ著『俳句』4巻

日本独自の文芸であった俳句は、今や世界の多くの国で “haiku” として愛好され、様々な言語で書かれるようになった。手元のウィリアム・ヒギンソン (William J. Higginson) 著『俳句ハンドブック』*THE HAIKU HANDBOOK*は1985年の出版であるが、すでに

10ヶ国語の“haiku”が収められている。<sup>4</sup> その原動力となったのが R.H. プライズ(R.H. Blyth, 1898-1964) の著書 *HAIKU* (『俳句』4巻本, 1947-52) であることは、多くの書物や発言から明らかである。詩人でドイツ文学者の星野慎一の労作『俳句の国際性 なぜ俳句は世界的に愛されるようになったのか』(1995) には具体的に世界中の多くの例が収められている。<sup>5</sup>

ドイツでは1890-1900に「ドイツ語俳句要素の出現」が見られたが、「ドイツ俳句の自立」は1950年以降であり、プライズ『俳句』4巻の影響が極めて大きいという。20世紀初頭にフランス象徴主義の詩人たちが“haikai”に見せた関心に比し、イマジスト派詩人たちがいかに深い関心を“haiku”に示し、Blythの*HAIKU*に影響されたか。そして、「第二次大戦後、物質文明に管理されたアメリカ社会に反抗する若者の詩人グループ」は「人生を、美を…神秘主義を愛し…産業文明が与えたアメリカ社会のあらゆる恩恵を徹底的に軽蔑し…文明に背を向けてありのままの自然に生きようとする姿勢は、おのずから東洋哲学への目をひらき、文学的には俳句に近づく機縁ともなった」<sup>6</sup> のである。「プライズは四巻の大著『俳句』によって広く欧米人に俳句を理解せしめたが、その俳論の根底にあるものはビート詩人たちを強く動かす原動力となった」<sup>7</sup> ビート文学運動の中心人物の一人アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg, 1926-)の言葉が同書に紹介されている。

私はバークレイに小さな別荘を持っていました。それが、俳句をつくるのにもってこいの所でした。 そんなわけで、クルーアクが訊ねてくる、ガリイがやってくる、フィリップ・ウォーレンもやってくる、ときどきピーター(P. オルロブスキのこと)もやってくるというわけで…私たちは何度もこの別荘で共同生活をしたものでした。みんながいっしょになって俳句をつくったことも、しばしばありました。私たちのあいだにはいつもプライスの四巻の大著『俳句』が置かれてありました。そして、重要なことは、クルーアクも、フィリップ・ウォーレンも、ガリー・スナイダーも、そして私自身も、みんな、プライスの四巻本に真剣に取り組んでいたということでした。<sup>8</sup>

そうして作られた短い詩の一つが紹介されている。

Sitting on a stump with a half cup of tea,  
sun down behind mountains—

## Nothing to do.

半分お茶の入ったコップを手に、切り株に腰をおろす

太陽は山々の蔭に沈んでゆく

無為自然のとき

『ゲーテと仏教思想』の著者星野慎一は「無為の悦びにひたるこの詩境」には「俳句のつよい影響が理解できる」とする。<sup>9</sup>

晩年米国カリフォルニアへ移り住んだ英作家オールダス・ハクスリー(Aldous Huxley 1894-1963) や英国詩人ジェームズ・カーカップ (James Kirkup) らもプライズに強い関心をよせた。プライズは1964年10月28日、65歳でなくなった(今年は没後40年にあたる)が、学習院大学旧図書館で行われた告別式で、安倍能成院長が弔詞の終わりに「プライズ君、おめでとう」と述べられた(と記憶する)。それは非常識な言葉のように思われるが、プライズをよく知る者には十分納得のいくものでもあったであろう。

*HAIKU*の著者、英人プライズに関してここでは詳述しないが、俳句・禅・川柳その他、日本独自の文化の研究者として国際的に知られ、また昭和21年元旦の昭和天皇「人間宣言」を実質推進した人物であることも知られているが、太平洋戦争中は、敵国人として神戸の外国人収容所にあつて *HAIKU*その他一連の日本文化研究に専念していた。ちなみに、戦中の昭和17年に、北星堂書店がプライズ最初の著作 *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS* (直訳は「英文学と東洋古典の中の禅」であるが『禅と英文学』の日本語題がついている)を出版している。

さて、名著 *HAIKU* 4巻本の中核の一つをなすのが、彼の「芭蕉論」であると言ってよいであろう。パツハと芭蕉をこよなく愛したプライズの著作には、芭蕉への言及は極めて多いが、今回ここで取り上げるのは、*HAIKU* Vol. I (『俳句』第1巻)の中から、“Section IV: The Four Great Haiku Poets”(第4章「四大俳人」)中の“Basho”(「芭蕉論」)の項である。本稿は、この部分に基づいてプライズの芭蕉観を概観しようとするものであり、またいまだに日本語訳が出ない故に敢えて試みたこの「芭蕉論」の拙訳を公表し、(それは本記者にとって極めて困難な、しかし感動的な仕事であったが)読者諸賢のご教示を仰がんとするものである。

## プライズの「芭蕉論」

プライズの『俳句』第1巻の中の「芭蕉論」とはどのようなものか。

俳句革新の立役者、正岡子規に至る俳句の歴史を代表する芭蕉・蕪村・一茶・子規といういわゆる四大俳人の中の最初の「芭蕉」論であるが、芭蕉の人間的魅力を、その俳句と生活的背景とに関連付けて論じている。

冒頭でまず、芭蕉は「宗教的な人間」であるという。「野や花々を前にして……芭蕉は神と関わるのだ」と。「芭蕉から始めなければ、俳句の解釈は薄っぺらなものになる」とも。

また日本の詩を理解するには他のいかなる国におけるよりも「詩人を理解する必要がある」という。われわれが「芭蕉に赴くのは、芭蕉は道であり、真理であり、命であるからだ」。しかし「師を模倣してはならぬ」と言う。そして「古人の跡を求めず、古人の求めたるところを求めよ」と芭蕉の言葉を繰り返す。

また芭蕉の人と作品の根底にあるものは「敬虔の心」(piety)であるとする。ゆえに「誠実さと敬虔の念を第一義に、作品を第二儀的なものとする時、詩は深みのあるものになる」と。そして「詩を感じる心がないことは、人間性への愛と神への崇拜の念がないこと」というワーズワスの言葉を引用する。

また「芭蕉は人生というものが十分深いものでもなければ、十分長いものでもないと感じていた。そこで彼は、一つ一つの行為に、また一瞬一瞬の時に、可能な限りの価値を付与したいと思ったのだ」と。そして「このささやかな生活を同時により偉大な生にしたかったのだ」と。そしてそこに「俳句の社会的価値」を見る。「英国の詩人たちはだれひとり弟子を持たなかった」「偉大な俳人はすべて弟子を持っていた」。「ここに重大な意味がある」「散文的な生活が偉大な詩的な生に組み込まれ得るのは、まさにこの宗教的な態度の中にあるのだ」と。「日常が非日常に」「人間的なものが聖なるものに組み込まれる」と。そしてプライズは、芭蕉の句「冬篋り又寄添はんこの柱」を挙げて、柱に寄りかかりながら芭蕉は「永遠を彷徨し」詩を読み詩を作る。また「名月や池をめぐりて」の句は教師芭蕉の面目躍如、「我々は今日月を見るとき芭蕉の眼で見ている」という。そして又弟子のらんせつ嵐雪きかく其角との愛情から生まれた句を紹介している。

また、プライズは弟子のちよら禱良の句から「禁欲主義者の姿と何ら変わらぬ芭蕉の描く詩人の理想的な姿」は、英詩人キーツのそれと変わらないとしながらも、「そこに至る手段には両極の隔たりがある」として、「野ざらしを心に風のしむ身かな」を掲げている。そして「自

然の風物や飢えや寒さを避けては真実の詩はありえない」こと。芭蕉は「俳句道」(the Way of Haiku)の伝道者であったこと。「キリストの如くに、彼の心は清貧と単純素朴を向いていた」こと。それは「彼の運命であり詩人としての宿命であった」ことを述べる。

また芭蕉の「生あるものへの同情は、生命の統一体についての何らかの学説や、又生来の動物好きからきたものでもなく、それは厳密に詩的なもので、従って偏った、限界のあるものであった。しかし誠実な心からのものであった」として「初時雨猿も小蓑をほしげなり」を挙げる。

また武士の生まれであった「芭蕉の穏やかさ (gentleness) は極めて特別な性質」で、「チャーサーについて述べたソーローの言葉」を引用するのだが、それは「男性のみに見られる女性的なもの」であるという。

そして、「芭蕉は生まれながらにして偉大な詩人であったわけではなく」、「努力と研究によって詩の深い領域へ踏み込んだのだ」。そして「研究とは、単なる知識の習得ではなくて、「精神的な意味への傾注」であったとする。

ブライズは、「芭蕉ほど儒教、道教、漢詩、和歌、仏教、禅、絵画、茶道などに関して真の教養を得ていた人は少ないであろう」とし、彼の西行への関心は、「客観的表現に見られる真の主観性・幽玄 (yugen)・痛みの感情・芸術性・純粹性など」によるものとする。そして芭蕉は「漢詩人以上に 西行を称賛した。清貧と漂泊の生涯ゆえに。また詩と宗教の深い融合 (fusion) のゆえに」と。

ブライズは芭蕉論の結論に言う。

「真の日本の天才であった芭蕉」は、先人たちの優れた「言葉」を読み、「その精神を自らの日常生活に実行した」と。

またブライズはその芭蕉論の結論の~~に~~に言う。

「書かれ得るすべてのことが書かれ、なされ得るすべてのことがなされた暁には、芭蕉はすべての日本人の中で最も偉大な人物であったばかりでなく、かつて生きた、そして自ら生きることによって生き方を我々に教えてくれた、数少ない人間の一人に数えられなければならないことが、知られるであろう」と。

以上、ブライズの芭蕉論を概観した。

以下はこの概観の基になったブライズの原文の全訳である。翻訳はできるだけ原文に忠実にとところかけ、原注もその箇所にもそのまま訳出した。訳者の考えで数ヶ所訳註をつけ

たところがある。思いがけぬ解釈違いや誤訳がないとも限らない。お気づきの方にはぜひご教示いただきたい。

四大俳人 芭蕉  
R.H. プライズ

Four Great Haiku Poets: Basho  
By R.H. Blyth

上田邦義・氏家瓢乎 訳 Translated by K.Ueda & H. Ujiie

俳句の歴史には芭蕉・蕪村・一茶という偉大な三つの名前がある。それに四つ目の名前、子規を加えてもよからう。芭蕉は宗教的な人間、蕪村は芸術家、一茶はヒューマニストである。芭蕉は野や花々を前にして詩人の心で自分を見つめるとき神と関わっているのだ。蕪村はといえば、彼はそれ自身独立のものとして、他と関わりない存在として事物と関わっているのである。一方一茶は、か弱い天使としての人間と、また人間と同じように日々苦勞して生計を立てているものとしての、鳥や獣と関わっているのだ。ここでもし我々が芭蕉から始めないなら、われわれの俳句解釈はまったく深みのないものになるであろう。蕪村の客観性も一茶の主観性も、ともにあの眉毛の長い、胃弱で消化不良の、小柄で、純朴な人間から生まれたのだ。

さて、日本の詩を理解するには、他のどんな国の詩の場合よりも、詩人を理解する必要がある。伊藤仁斎（原注。1627 1705 儒学者）が言っている。

師は道のあるところ、師を崇むるはすなはち道を崇むる所以なり

（師のあるところに真理がある。師への尊敬は真理への尊敬である）

それゆえ我々が芭蕉に赴くのは、彼が「道」(Way)であり「真理」(Truth)であり「いのち」(Life)であるからなのだ。人間を離れて「仏陀」(Buddha)はないが、とは言えわれわれはキリストをも、他のどんな人間をも模倣(imitation)すべきではない。いかなる師をも模倣すべきでない。芭蕉自身の言

古人の跡を求めず、古人の求めたところを求めよ。

（古人の足跡をたどるのではなく、彼らの求めたものを探し求めるべきだ）

ワーズワスの場合と同じように、芭蕉の人格と文学作品の根底にあったものは敬虔の念である。<sup>げんせい</sup>元政（原註。1623 - 96；僧侶にして歌人）の次の言葉は東洋の他のどんな詩人よりも芭蕉によくあてはまるものだ。

忠孝を以って根底となし、文学を以って枝葉となさば詩も亦深遠なり  
 （誠実と敬愛を根底とし、文学作品には二義的価値しか付与しない時、詩は  
 深遠なものとなる）

ワーズワスはこのことを次のように言っているのだ。

詩にたいする感性を持ち得ないということは、私の語義では、人間性への  
 愛と神への崇敬の念がないということである。

芭蕉は人生は十分深いものでもなければ、十分長いものでもないと感じていた。そこで彼は一つ一つの行動に、また一瞬一瞬の時に、可能な限りの価値を付与したいと思ったのだ。彼はわれわれが送っているこの卑小な人生を、そのまま同時に、より偉大な人生にしたいと思ったのだ。一本一本の花の開花は春を告げるものであるべきであり、あらゆる苦痛は生命誕生の苦痛でなければならず、人間はすべて俳句詩人で、「俳句道」(the Way of Haiku) を歩む者であるべきであると。

それはささやかな人々の、ささやかな日の、ささやかな人生であった。すでに男は死んでいたが、独り言を言った「われわれはそれをより大いなる一日の中に包み込み、より大いなる生命の輪に組み込まない限り、すべてはまったく無意味になる」と。(原註。D.H.ローレンス『死んだ男』)

ここに語られている「より大いなる生命」とは何か。「ささやかな命」はいかにしてそこに関ることができなのか。散文的な、しかしより適切な形で言い換えをすれば、俳句とはいかなる社会的価値をもつものか、である。偉大な俳句詩人、とりわけ芭蕉の生活を、ワーズワス、ミルトン、シェリー、キーツ等々の生活と比較するとき、一見さほど重要では

なさそうになある事実に気が付くのだ。それは日本の俳句詩人たちはすべて弟子を持っていたが、英国の詩人は誰一人として弟子を持たなかったことである。これは他のどのような事実よりも重大な意義をもつものだ。なぜならば、ささやかな人々のささやかな散文的な生活が、偉大なる詩的生に組み込まれ得るのは、まさにここに、この宗教的な態度の中にあるからだ。

冬籠り又寄添はんこの柱

芭蕉

Winter seclusion:

Once again I will lean against

This post.

Basho

(冬籠りである。今年もこの柱に寄りかかって過ごそう)

ささやかな生が大いなる輪に組み込まれた例がここにある。またそれはこうした生き方の中にしかない。非常の中の平常、奇跡の中の日常、精神的事象の中の物質的事象、神的なものの中にある人間的なるものである。床に座って柱に背をもたせることは安楽の極致には見えないかもしれないが、これは芭蕉が自身に約束した快樂なのだ。冬のあいだ、雪が静かに降るとき、彼は昨年と同じように、柱に凭れながら、

永遠を彷徨するさまざまなる思い

に思いふけりながら、「われわれ自身の」永遠のことを、また大いなる命のことを思い、詩を読み、詩を書くのだ。柱は数え切れぬ徹夜で擦れて滑らかになり、頭をもたせた部分は黒ずんでいる。この柱こそが唯一の頼みなのだ。

「俳句道」は、フランシスコ修道会風の清貧と、さらに全身全霊のエネルギーの集中を要求する。それは事物の中に絶えず自己を没入することだからだ。芭蕉はそれを次のように詠んでいる。これは注目すべきことだ。そして我々は彼が言うことを信じるのだ。

名月や池をめぐりて夜もすがる

The autumn full moon:

All night long



I paced round the lake.

(仲秋の名月である。一晩中池を廻ってしまった)

一晩中月を眺めながら、その成果としてこの貧弱な一篇の詩しか書けなかったのか？ ここで想起さるべきことは、芭蕉は教師であったことだ。つまりいま我々が月を眺めるときには、芭蕉の眼で見ているのだ。あの月を見上げ、また静かな湖面に映る月を眺めたその芭蕉の眼で。蕪村は言う。

さむしろを畠に敷て梅見かな

Spreading a straw mat in the field,

I sat and gazed

At the plum blossoms.

(私は畠にむしろを敷いて、そこに座って梅を見上げて楽しんだことだ)

坐って花盛りの梅を見上げるといのは実はそう単純なことでも楽なことでもないのだ。蕪村は詩人であっただけでなく、画家でもあった。ここで彼は、この梅の木のもつ詩的・絵画的意味をいわば何もものを言わず、身じろぎもせずに表示しようとしたのだ。それが“gazing”(見上げる)の意味なのだ。

芭蕉の一句で、生活の厳しさと弟子たちへの優しい愛情の双方を表したのが次の句である。

春立つや新年ふるき米五升

The beginning of spring:

For the new year,

Five sho of rice from last year.

(春の初め。新年のために古い米五升が旧年から持ち越されている)

深川では、芭蕉の弟子たち、とりわけ杉風<sup>きんぷう</sup>が芭蕉に生活必需品一切を運んできた。芭蕉は家に五升(原註。1升=3.18パイント=1.8リットル)はいる大きな瓢箪<sup>ひょうたん</sup>を持っていた。新年幸せなことは、何よりも弟子たちの忠誠と愛情を思い出すことにある。それが旧年から残っている米に象徴されているのだ。同様の句は、

嵐雪らんせつが送りし正月こもで小袖を着て  
誰やらが姿に似たり今朝のはる

**The first morning of spring**

**I feel like**

**Someone else.**

(正月に嵐雪にもらった絹の着物を着て。春の最初の朝、誰か他人のような気分になる)

原句は文字通りには、「誰かに似ている」である。芭蕉の気取りのなさは、次の句にも表れている。

和角たてほたる夢きかく虫句  
朝顔に我は飯食ふ男かな

**I am one**

**Who eats his breakfast,**

**Gazing at the morning-glories.**

(夢と虫についての其角の句に答えて。

朝顔を眺めながら朝食をとる、私はそんな男である)

これは其角の次の句に対する芭蕉の返句なのだ：

草の戸に我は夢きかくくふ虫哉

其角

**A firefly;**

**I partake of the smart-weed,**

**In my hermitage.**

**Kikaku**

(私は庵の中で夢を食べている、虫のように)

其角の意味するところはこうだ。自分はホタルのように夜を好む。風変わりな好みだが、ほかの人たちの嫌いな夢の苦い風味を好む、と。これに対して芭蕉は、真の詩的生活はそこにはない。朝食には米や漬物を食べ、自然と四季がもたらす風物を眺めることにある、というのだ。

芭蕉の生活が裕福なものであったとか、程ほどの暮し向きであったと考えることでさえ、聖フランシスを富者と考えることと同様、難しいことだ。芭蕉はメッグ・メリリーズの生活に極めて近い生活をしていただけだ。

朝の多くは朝食をとらなかった  
 昼の多くも昼食をとらなかった  
 また夕食もとらなかった、代わりに  
 ただ月を見上げていた

ちよら  
 樽良がわれわれに芭蕉の絵を見せてくれている。ヨーロッパの普通の詩人とは何たる相違であろうか。

しぐれ  
 旅姿時雨の鶴よ芭蕉翁

In traveling attire,

A stork in late autumn rain:

The old master Basho.

(旅姿で秋雨の中に立つこうのとりの姿、それが芭蕉翁の姿)

『野ざらし紀行』の最初の句は、芭蕉の考えるあるべき詩人の姿を示している。それは禁欲主義者の姿に他ならないといっている。そこに指向されている最終目標は、キーツ(訳注。1795-1821。イギリスの詩人。残された多数の書簡にその思想や生き方が表れている。25歳で夭折した)が自らに掲げた理想と異なるものではない。だがそこへ到達するための手段には両極の隔たりがある。

野ざらしを心に風のしむ身かな  
 Resigned to death by exposure,  
 How the wind  
 Cuts through me!

(身を野にさらして死ぬ覚悟はある。風がわが身を突き抜けてゆく)

道端で死ぬ覚悟で彼は旅立つのだ。なぜ家に泊まらないのか、安楽ではなくともせめて雨

風を凌ぐために。それにはいくつか理由がある。風物や寒さや飢えを離れて本当の詩はあり得ないのだ。さらに芭蕉には伝道者魂があった。彼は日本中に、「俳句道」を広めることのできる人々がいることを知っていたのだ。しかしそれ以上に芭蕉の心はキリスト同様、清貧と誠実に向っていた。それが彼の逃れられない運命であり、詩人としての宿命であった。

年の市線香買いに出でばやな

The year-end fair:

I would like to go out and buy

Some incense-sticks.

(歳末の市に出かけて行って、線香を買いたいものだなあ)

芭蕉の欲望に対する穏やかさがこの句に明らかである。普通の基準からすればこれほど安価で、これ以上わびしい買い物はあり得ないだろう。

生あるものに対する芭蕉の共感、生命体の統一性についての何らかの学説から出たものでもなければ、生物への生来の愛好から出たものでもない。それは厳密に詩的なものであって、それゆえにそれは偏った、限界のあるものであった。しかしそれは誠実な、心からのものであった。それぞれの句に見られるように、その時その時の深い体験から出たものである。神々が住まう伊勢から悲しい思い出の郷里への帰途のことである。淋しい森を通り抜ける時、冷たい雨が落ち葉を叩いていた。その時芭蕉は一匹の小猿が身を丸くして大枝に坐っているのを見たのだ。人間には到達できないまでの従順な悲哀を漂わせて。それは動物にしか見られない悲哀である。

はつしくれ こみの 初時雨猿も小蓑をほしげなり

First winter rain:

The monkey also seems

To want a small straw cloak.

(この冬初めての時雨。猿も小さな蓑を欲しがっているようだ)

動物に対するセンチメンタリズムから彼を護ったのは、彼自身生活上の不安を多く抱えていたからであり、また彼はそれらは避けがたく、ある意味では望ましいものだと見ていた

からである。

芭蕉の穏やかさ（彼は武家の生まれであった）は極めて特殊な性質である。我々は彼をチョーサー（訳註。Geoffrey Chaucer, 1340? - 1400。中世イギリスの詩人）になぞらえてもいいかもしれない。ソーロー（訳註。Henry David Thoreau, 1817 - 62。アメリカの思想家、『森の生活』の著者。膨大な日記を残した）がチョーサーについて言っている。

我々は彼の天分を女性的なものであって男性的のものではないと言いたくなる。だが、この天分は極めて稀に女性のうちに見られた女性性であるが、仮にあっても評価されないものである。あるいは女性にはまったく見出されえないものかもしれない。男性のみが持つ女性的なるものであるかもしれない。

芭蕉は生まれながらの偉大な天才詩人であったわけではない。彼はその人生の初めの40年間、秀句は、いや佳作でさえ書かなかった。同時代の鬼貫<sup>おにつら</sup>は25歳で円熟に達していた。だが芭蕉は、ひたすらなる努力と研究とによって、詩の一番深い領域に足を踏み入れたのだ。ここで研究とは、単なる知識の獲得ではなく、彼が俳諧の世界で受け継いだ文化の精神的な意味に自らを傾注することであった。確かにこれまで芭蕉ほど儒教、道教、漢詩、和歌、仏教、禅、絵画、茶道に関して、真に教養のある人物は少なかったであろう。『笈<sup>あひ</sup>の小文<sup>こぶみ</sup>』の中に彼は書いている。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、其の貫道する物は一なり。

季吟<sup>きぎん</sup>（1623 - 1705）の下で芭蕉はおそらく『万葉集』『古今集』『新古今集』『源氏物語』『土佐日記』『徒然草』さらに『山家集』の西行の和歌を学んだと思われる。他の俳句詩人たちも西行の研究をしている。例えば西行の絵についての宗因<sup>そういん</sup>の句：

秋はこの法師すがたの夕かな

This Hoshi's appearance,

In the evening,

Is that of autumn.

(この法師の、夕方の姿、それが秋の姿なのだ)

西行に関わる俳句の数は極めて多く、芭蕉自身の西行の和歌に言及した、またはそれに基づく句も少なくない。それらに見られる芭蕉の関心は、外観の客観性に秘められた真の主観性、幽玄 (yugen)、痛み of 感情、芸術性、純粹性などによるものであった。中国の詩人たち以上に芭蕉は西行を称賛した。その清貧と漂泊の生涯ゆえに、また詩と宗教の融合 (fusion) のゆえに。

真に日本的な天才であった芭蕉は、上記のような多くの人々の片言隻句<sup>へんげんせつく</sup>を読み、自らこれを繰り返したというだけでなく、かれらの精神を自らの日常生活に実行したのだ。ここに芭蕉とジョンソン (訳注。Samuel Johnson, 1709-84. イギリスの作家。ドクター・ジョンソンとも) の、遙かなる隔たりにもかかわらず、深い類似性がある。まったくタイプの異なる二人の人間であるが、共に実際の著作が保証する以上に高い地位を文学史に占めるのは、かれらの人間としての個人的性格 (personal character) によるものだ。

書かれ得るすべてのことが書かれ、なされ得るすべてのことがなされた暁には、芭蕉はすべての日本人の中で最も偉大な人物であったばかりでなく、かつて生きた、そして自ら生きることによって生き方をわれわれに教えてくれた、数少ない人間の一人に数えられなければならないことが、知られるであろう。

- 
- <sup>1</sup> James Kirkup, *The Genius of Haiku: Readings from R.H. Blyth on Poetry, Life, and Zen*, The British Haiku Society, 1994  
 Kuniyoshi Munakata & Michael Guest, *Essentially Oriental: R.H. Blyth Section*, Hokuseido, 1994  
 Kevin Dobbs, "Blyth books say volumes about the Asian mind", *Asahi Evening News*, November 20, 1994  
 David Burleigh, "R.H. Blyth: Seeing the West through Oriental eyes", *The Japan Times*, March 28, 1995
- <sup>2</sup> Aldous Huxley in a letter to Mrs. Elise Murrell writes on November 4, 1951, at Los Angeles: "There is a very curious book by a man called R.H. Blyth, called *Zen in English Literature*. Blyth is a professor at some Japanese university and has lived in that country for many years. The book deals with the relation between moment-by-moment experience of Things-as they-Are [and] Poetry. It is a bit perverse sometimes, but very illuminating at others," quoted from Grover Smith ed., *Letters of Aldous Huxley*, Chatto & Windus, 1969, cited in Kuniyoshi Munakata, "The Most Remarkable American: R.H. Blyth on H.D. Thoreau", *Otsuka Review* 9, 1972, pp.56-67  
 D.T. Suzuki, "Reginald Horace Blyth(1898-1964)" and Shojun Bando, "In Memory of Professor

Blyth”, *The Eastern Buddhist New Series*, The Eastern Buddhist Society, Otani University, September 1965

Kuniyoshi Munakata, “R.H. Blyth Bibliography with Quotations”, *Reports of the Department for Liberal Arts, Shizuoka University* Vol.8, 1973, pp.69-91

- <sup>3</sup> In the “Introduction” to *Selections from Thoreau’s Journals* Blyth writes: “Thoreau is the most remarkable, perhaps the greatest man America has produced,” and in the “Introduction” to *A Shortened Version of A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, “When the final account is made and God closes the books, it may be found that Thoreau was the one real man America produced.” About these Blyth writings, see Munakata “R.H. Blyth Bibliography with Quotations”, above mentioned.

Kuniyoshi Munakata, “Henry Thoreau and Zen,” *Otsuka Review* 14, 1977, pp.22-33

- <sup>4</sup> William J. Higginson, *THE HAIKU HANDBOOK: How to Write, Share, and Teach Haiku*, Kodansha International, 1989. Copyright 1985

- <sup>5</sup> 星野慎一 『俳句の国際性 なぜ俳句は世界的に愛されるようになったのか』博文館新社、1995

「まだ少女のころ俳句を詠み、日本詩人の勤勉、自己を律することの厳しさに尊敬の念をいだいた。じっさいわたしが句作を心がけるようになったのはずっとあとのことで、初めは村の農民に俳句を学んでもらうのが目的で、アレマン語でつくってみた。・・・わたしの『エルザスの俳句』(自家版 1963) が刊行されたときのものすごい反響には、ほんとにびっくりした。・・・わたしはヒロシマで受けた大きな苦難にたえて今日のある偉大な日本人に自分の作品を捧げたいと思う」(リーナ・リッター) 160-61 ページ。

- <sup>6</sup> 星野、186 87 ページ

- <sup>7</sup> 星野、188 89 ページ

- <sup>8</sup> 星野、190 ページ

- <sup>9</sup> 星野、190 ページ。なお、すぐ上の英語 3 行詩の日本語訳は上田によるもの。

## 参考資料 (註に挙げたものを除く。発行順。)

鈴木大拙著、北川桃雄訳 『禅と日本文化』岩波新書、1940

R.H. Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics*, Hokuseido, 1942

R.H. Blyth, *Haiku* 4 Vols., Hokuseido, 1949-52

R.H. プライス著、R.K 生訳 「詩とは何か」 『心』第十二巻第十一号、平凡社、1959 年 11 月、79 - 83 ページ

R.H. Blyth, *A History of Haiku* 2 Vols, Hokuseido, 1963-64

宗片邦義 「R.H. プライズの業績」 『英語教育』1965 年 1 月号、大修館、45 ページ

日本大学英文学会 『英文学会会報 R.H. プライス先生追悼特集』1966

- 
- 宗片邦義「ヘンリー・ソーロウと R.H. プライス」『ヘンリー・ソーロウ協会会報』1976 年 9 月、4 - 6 ページ
- 佐藤和夫『菜の花は移植できるか』桜楓社、1978
- Mallory Fromm, "R.H. Blyth: A Brief Biography and Appraisal", 『津田塾大學紀要』1983
- 新木正之介幹事責任、川島保良編『回想のプライス』回想のプライス刊行会、1984
- 佐藤和夫『俳句から HAIKU へ』南雲堂、1987
- 白米満行「R.H.プライスの人と業績」(1)『皇學館論叢』第 20 巻第 6 号、1987、1 17 ページ
- 同「R.H.プライスの人と業績」(2)『皇學館論叢』第 21 巻第 3 号、1988、1 17 ページ
- 吉村侑久代「R.H.プライスのルネサンス」『松ヶ岡文庫研究年報』第 9 号、松ヶ岡文庫、1995
- 同『R.H. プライスの生涯 禅と俳句を愛して』同朋舎出版、1996
- 同「アメリカ禅ハイクの系譜 R.H.Blyth と James W. Hackett」『東海英米文学』第 6 号、東海英米文学会、1997
- 白米満行「鈴木大拙『禅と日本文化』第 7 章「禅と俳句」の成立について」『皇學館論叢』第 30 巻第 1 号、1997、1 20 ページ
- R.H. プライス著、宗片邦義訳「禅と英文学：俳句をどう読むか」古田紹欽也・柳田聖山・鎌田茂雄監修、柳田聖山編集解説『叢書 禅と日本文化 4 禅と文学』、ペリかん社、1997、327 349 ページ。柳田聖山プライズ解説 378 ページ
- Ikuyo Yoshimura, "R.H. Blyth and American Haiku R.H. Blyth, James W. Hackett, and Richard Wright", 『朝日大学一般教育紀要』第 7 号、朝日大学、2001
- R.H. プライス著、上田邦義・氏家文昭訳「俳句の技巧」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』創刊号、2001、111 155 ページ
- エイドリアン・ジェイムズ・ピニングトン著、白米満行訳「第十九章 R.H. プライス」、イアン・ニッシュ編、日英文化交流研究会訳『英国と日本 日英交流人物列伝』博文館新社 2002 年、371 - 398 ページ
- 速川和男、川村ハツエ、吉村侑久代『国際化した日本の短詩』中外日報社、2002
- 杉本京子「R.H. Blyth の禅について」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第 3 号、2003、227 238 ページ
- 吉村侑久代「英文誌 *The Cultural East* からの東洋文化総体の基盤をなす精神世界 *Editorial* の翻訳を試みて」『松ヶ岡文庫研究年報』第 18 号、松ヶ岡文庫、2004